

夏を快適に

大阪府豊中市立第十三中学校

三年 松浦 莉珠

大阪に住む我が家は、毎年お盆とお正月に祖父母の住む淡路島に帰省するのが習わしだ。

けれど、今年はコロナ感染症のため、お盆の帰省はしないことになった。会いに行けない代わりに、ビデオ通話等で祖父母とやりとりしていると、ふと祖父母の家の障子が前と違っていることに気付いた。

「あれ？おばあちゃん後ろの障子変えたの？」と聞くと、

「そうよ、夏やからね。」

と返ってきた。なんでも、毎年六月の中頃になると和室の障子や襖を簾戸という建具にわざわざ取り替えているらしい。そして九月のお彼岸頃には、また元の障子と襖に戻しているとのこと。知らなかった。恥ずかしながら、今までそういう所を意識したこともなければ、変化に気付いたこともなかった。

それにしても、毎年二回も建具を外して取り替えるなんて、想像するだけで大仕事だが、大変じゃないのか聞いてみると、昔からしていることだし、ごく当たり前のことだそう。他にも、窓の外に簾を吊るしたり、ドアの部屋には簾戸の代わりに夏用の衝立や屏風を立てるそうで、竹や葦で出来ているそれらは、適度な目隠しや日除けが出来る上、隙間からはしっかりと風を通すことが出来る為、各部屋の戸を閉めた状態でも、家全体に風を通すことが可能なのだ。祖母曰く、やっぱり涼しいし自然の風が気持ち良いとのことだった。

確かに、夏の祖父母の家はいつも開放的で、風鈴がよく鳴っていた。田舎の家はそういうものだと思いついていたが、快適に暮らすための知恵と工夫と労力により、あの空間が作り出されていたことに改めて気付かされた。

来年こそは祖父母の家で、簾戸を抜けてくる風を感じながら、ゴリゴリと手回しで作るかき氷を皆で食べつつ、いつもの夏を味わいたいものだ。